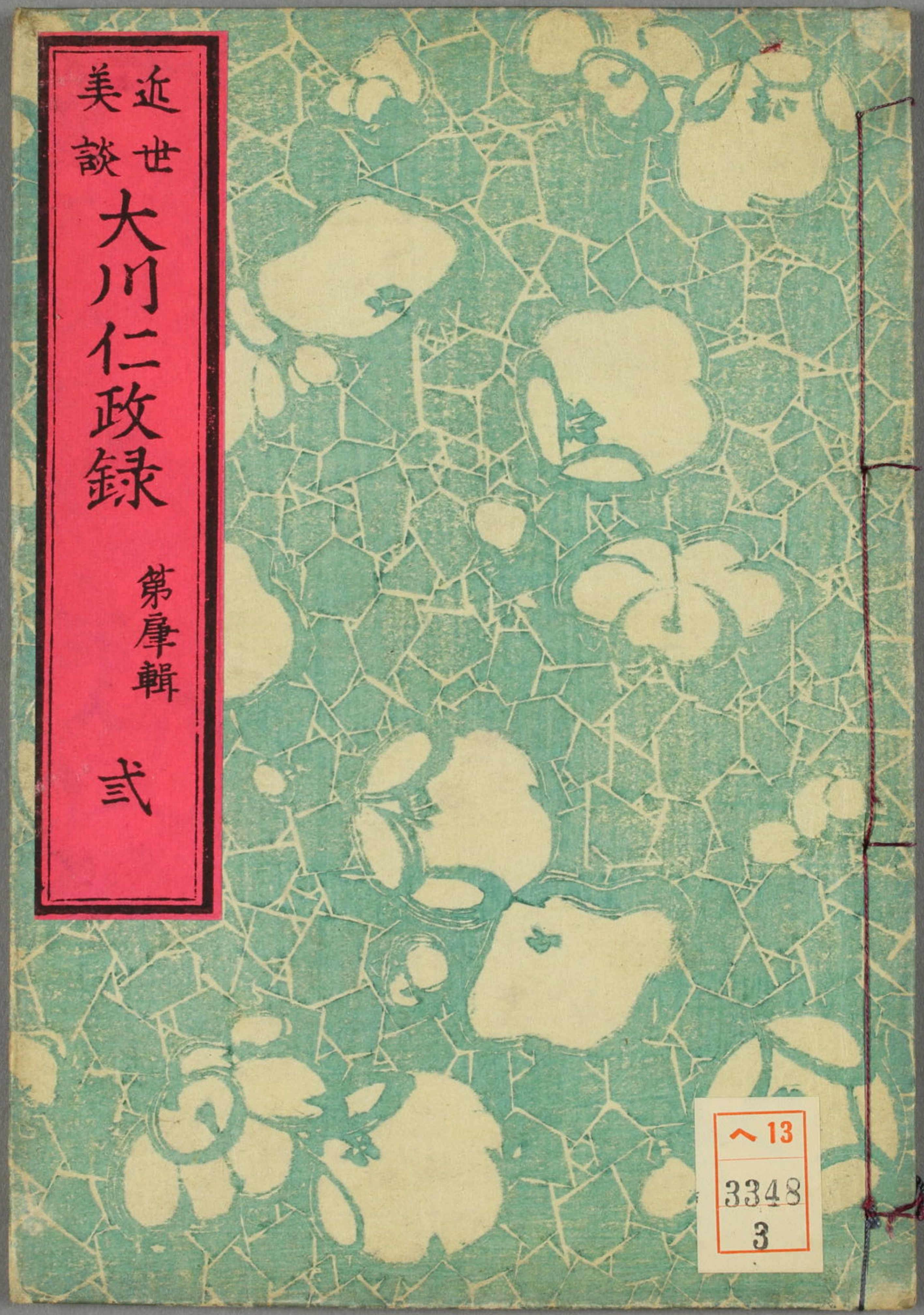




近世  
美談  
大川仁政錄

第摩輯

式



~ 13  
3348  
3



門へ13  
3348  
3

近世  
美談

大川仁政録筆輯卷之三

松亭主人著

大正十年八月廿九日  
本大學出版部  
贈

穀物屋吉之助放蕩話

富貴は素く富貴と行ひ貧賤は素く貧賤と行と  
や時又栗橋ある穀物屋吉左門方へ鎌府出郭支配人善空  
より喜八更命無度くと戻くる趣と委細と文通と以聞なれば  
吉左門も悦成程王用と相捨女と性根と奪はと當時同居の  
趣日頃の忠魂誠実ふ似合がるの不屈との取行といふ  
らせと年弱さ者の習誰とも弱さ砌ハ女色と溺る者  
るりと了筒の上何分も息吉之助が命の親とも物り

大川仁政録筆輯卷之三

渠奴が忠実誠心と以難痘と助以前奉公中の精勤且ハ  
 此度善兵工が紙囊と落せしと早速又持来り返舟小及ぶ  
 ふと點止ぐき善男子ゆへ金具屋五良兵殿具ハ支配人善兵  
 兩人の執成て出入の許さねども格別の沙汰と以銀壹貫目と  
 以家業種銀とせよと恵まれられ喜ハハ踴躍とて再活命と得る  
 思ひて一人又王恩と思ひ是全く金具屋の主人善兵工との兩人の  
 厚き情の紹介ゆへと重く恩謝と述より時又本家吉左衛門が息  
 追々成人きて今年十九歳とて人品よき生立とつひ賤くざる産  
 ゆへ吉左衛門夫婦の寵愛限なく素讀習字等出精小及ぶ  
 とくども何分あも辺鄙の師匠ゆへ行届くは是又於都會の

先生家きくぞの熟練も及びがく且少々ハ遊藝万端心得あり  
 て人中人出て恥辱と受せんも残念あればとと鎌倉出店へ言ふ  
 と遣し隣街たる嫁沢町とて素讀謡曲とて和哥誹道追  
 も教受の大人りりて至て篤実謹行の君子をりとて當地  
 ハ勿論他國近在より豪家の息等大勢寄宿有て切磋琢磨  
 小及ぶ者多し辛程近しとて入塾小及び朝中へ通学ゆて活華茶  
 道ハ米町新道小住とて高名なる堀の内先生へ習学小及びゆる勿論  
 豪富の息ゆへ雜費は厭无練磨ゆへ兩先生は於ても格別抽んで切磋  
 小及びゆる時又堀の内の二三子小米町二丁目小竹林屋とてハ大家の  
 吳服やの息虎之夕とつて伶俐茶花の兩道と熟練の息と大い

断髪つんぱんの睦むつびとと親おやく交まじりりるる頃ころへ秋あきの始はじ花はな水みづ橋はしの納な涼りやう  
 又また誘さそはは恋こひが窪くぼ燈とう籠かご見み物ものいいろろんんとと勸すすめめられられるるもも素す来らい  
 土地見ち兼けん知ちりりて万ま諸しよも支し配はい人ひと善ぜん兵へい工こう又また相あ談だんの上うへああるるででののいい  
 兼かてか嚴げん父ふの命いのち令しるしめめへへ此この日ひ兎う角かく又また彼かの虎こ之の助すけが腹はら立た又また及およぶぶるる中なか  
 追おのの才さい子しゆゆへへ程ほど能あた相あ断だんりりて出で店てんるる支し配はい人ひと又また咄はなりりるるれれ善ぜん  
 兵へい工こう諾だくと成な程ほど虎こ之の助すけ様さまへ御ご若わ年ねんといいつつををぐぐ當あた録ろく府ふ産さんの上うへ  
 何なにといいふふも御ご家け業ぎやうぐぐといい御ご大だい家けの賢けん息いきゆゆ万ま諸しよ又また怠たい慢まん  
 方かた方かたるるれればば隨ま分ぶん御ご同どう伴ばん有ありりてもも然しかるる若わ恋こひヶが窪くぼとと樓ろうへ御ご越こ者もの  
 ととももかかるるるる色いろ情なさけ又また溺おぼ家けと忘わすれれて放はな心こころををさされれててのの僕ぼくが主しゅ人にんへ  
 海うみがぐぐ候まち間ま能あた御ご心こころ得え有ありりて然しかるる自じ然ぜん青あお樓ろうへ御ご越こるる

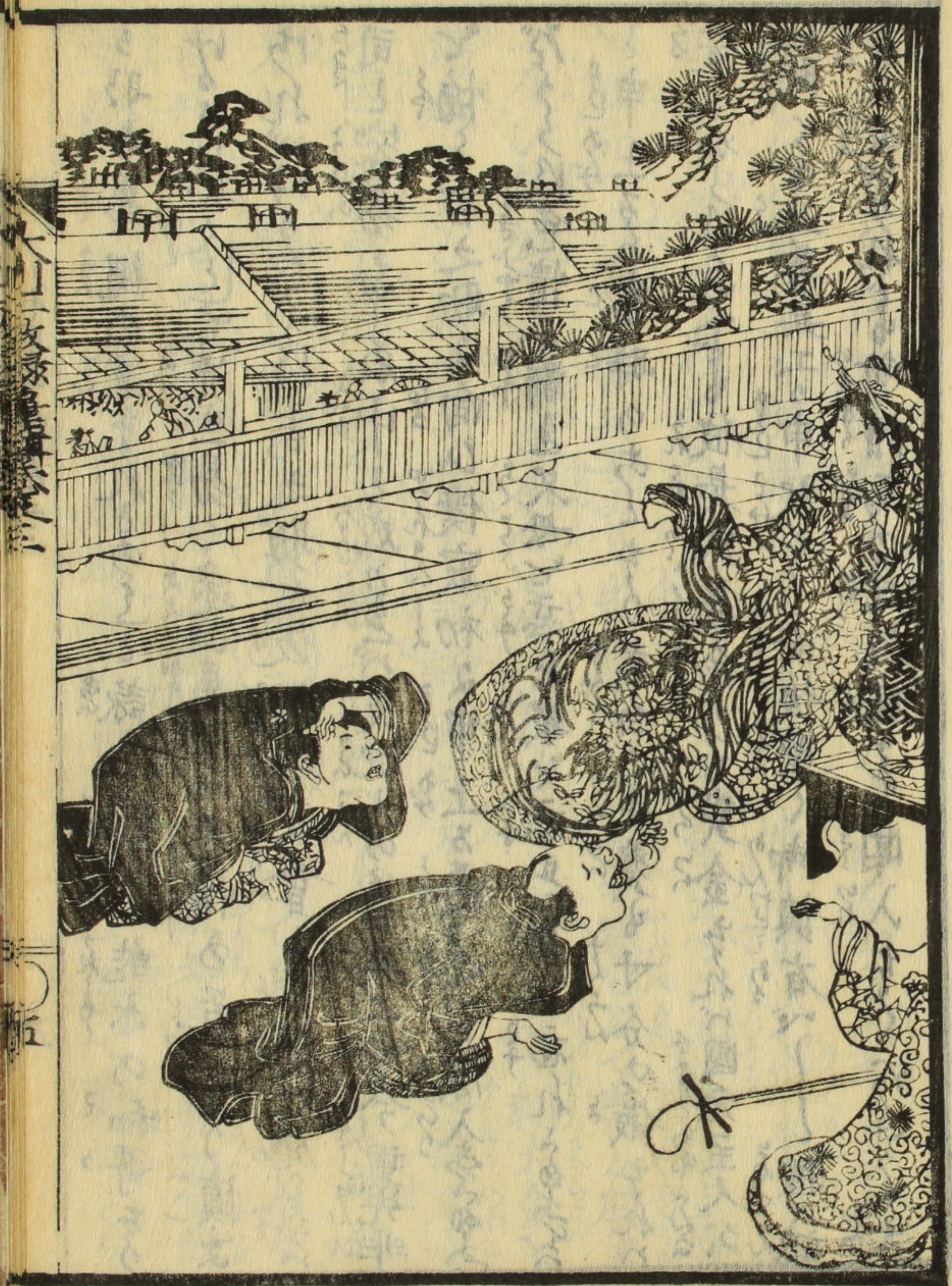
ううろろくくひひて先ま黄わう白はくと三さん四し両りやうををりり花はなと時ときといいてて絳けい婦ふ花はな直ちき  
 と始はじ取と婢ひああどど手て際さい傑けつ又また遣つししとゆゆ緩ゆる簾れんの汚よごぬぬややりり有ありり  
 たたししとてとて黄わうと五ご六ろく枚まい渡わたりししるるれれ吉きち之の助すけの太お大だい又また歡よろこびび善ぜん兵へい工こうとと喻よ  
 処ところと能あた兼けん知ちしして其その翌あつ日ひ黄わう昏こん頃ころより納な涼りやう船ふねとと虎こ之の分ぶんに  
 誘さそははるる花はな水みづ橋はしの納な涼りやう放はな花はな火ひああど見けん物ぶつ又また眼めと驚おどろろしし暫しばく打うち  
 眺ながめめ肌はだ又また風かぜと入いりり船ふねと着つききて土ど手て八はち丁ぢやうも歩ありり過すりり頻しばしばく  
 大だい門もん口くちは至いたりり仲なつの丁ぢやう山さん口くちは至いたりり青あお樓ろうへ誘さそははるる樓ろう又また上ありりて絳けい枝し  
 兩りやう三さん組ぐみとすすみみ酒しゆ宴えん大だい騒さう又また及およびびるる吉きち之の助すけの支し配はい人ひとが指さし押おししの  
 此この時ときありりと樓ろう主しゅと始はじ王わう婦ふ家け嬢ぢやう取と婢ひ下げ男なん等とう又また至いたりりてて金きん  
 の花はなと惠めぐみみるるれればば虎こ之の分ぶん追おひひ又また美みししききとああははれれるるこことと大だいきき又また悦よろこ

是より虎之入兼て馴淬の花扇や遊妓雲井とらへて呼とせ吉  
 之助も同家の呼出の遊妓司とつて揚させて花扇屋に  
 まつて酒宴更闌及びびりの素来吉之介の初ての儀は  
 膳と潰し多も道理をり斯て虎之介の吉之助が小便立  
 折密又司又明とて今宵とてその且那の下総栗橋とて  
 処と穀物屋とて録倉とてもすれり程の豪富の子息  
 ちれが隨分爲又ちりの客人をれが今宵斗でちり近音又  
 々誘ふべし必ず怠慢と交言べしと有右此司とのふ  
 皇都の婦とて眉目勿論廓中於て三とん下らぬ全盛の  
 上伶俐産ゆ人素吉之介が人品よく美男とれが司も外あり

實を冬一交會及びびれが岩木とてぬ吉之助の忽此台心  
 と奪れ雨の降夜も雪の朝もひさしく通ひ殊と下総國に於  
 一二と争ふ豪富の息男とれがぬ黄白の恵も毎般  
 ありなれが絃妓翫閑妓婢とて吉君々々と翫敬ひなれ  
 司も恋情深く今の中々真の男とて生涯の約束堅く結  
 びつら互ひ一日逢ねが百日の思ひとて吉之助も現と成る  
 ぞ道理をり

吉之助勸當を受る翫閑五八実意の話

木の準繩又従へば則正一君諫又従へば則賢とらふ古語と前中  
 納言定房卿の此意と大和の言葉とてとらふ人も身と祈



吉之介の遊園

五



吉之介の遊園  
に誘はるる  
遊園の  
図

吉之介の遊園

五

う形お墨繩の直ちれとのと詠ど給ひ能尔の和哥あり  
 けりされ人にて流生易く迷ひ易き色情の道あり慎ま  
 らればらるる吉之助の仮初の交會より深く沉み今  
 司と容易ありぬ中と成りまは支配人の善兵工も今更先非  
 と悔吉之助又向ひ僕家初又申上る通り必ぞ深入るゆ  
 だうう色情又溺れ父母と忘れ家と忘れ身と忘れぬ  
 と申上る當時のあこちり黄白の失費も寸分の儀せられ  
 苦一かゝれといへども彼是貳箱余りも費金せられ國元主人公  
 へ聞ても此善兵工の申訳を向後堅く御慎有べし種々諫  
 言及びびれども所謂馬の耳に風を聞く聞入なくやうも大

風又灰のどくれ遊雜費を絶半年をりて三四千兩斗りの無益  
 費せられ善兵工も徳果抛き此趣と審書状と以本家へ  
 通達及及びびれ父吉左工門大さ小驚急出府有吉之介  
 と膝元へ呼寄善兵工より告越る文面の趣と以て散々腹立  
 お及び遊妓の偽媚は本心と失ひ身と忘れ親と忘刺大金と  
 湯水のどく無益又費一言語同断不屈の至り向後父子  
 の因と断きり同何ま成共勝手に往べしとて河内嶋の古裕坊  
 着せしあ繩と以帶とて鳥目三メ錢と与へて追出さるる  
 善兵工始店の者共種々と怪れれども兼知なく帳面と改  
 栗橋へむ飯りたり吉之助も今更途方又暮て歎けとも

詮方をけき覺悟と究め其夜花水橋へ泣々往橋の上  
より身と没んと礫と拾ひ集て袂へ入既又飛込んと  
折るる燈灯とくけく通掛り人の是別人又何れ恋  
窪の幫閑五八を此躰と見より走より何人なりと抱  
顔見ま吉之介ゆへこそ何故の仕合と問きて吉之助面目  
ぢくあて放して殺せんと泣侘ども五八へ猶も引止  
僕修御恩は預りし尊公人を此見遣せ殺せと仰られ  
御見附申ころが畢竟双方の大幸何れ鬼も角始末の後で  
の御咄まづく僕が宅へと無理又多し我家は誘ひ女房不  
も引合如何る子細く此中より見苦き姿を身と

没んといふされしやといふり吉之助涙まぎ今朝  
國元より巖父の出府有て四千兩余り無益費とて不届  
立腹の上此中か古裕又繩の帶取詮再び司より申成  
難生存て詮る身の上死さんと覺悟と究ると聞て五八  
叔々存知もよりぬ更の出来いゆる危なき更を此上へ憚  
遊城司と談合の上私宅又御密養申上置折を以御勘當の  
御免り申に御執持申るると色々真実の諫言を  
食客と成り司も始末と聞より五八方へ来り吉之介は逢  
愚婦より此身の上向後の愚婦が御身養申侍らんか  
餘此外へ御出あて此家は居て賜つと忠実よ慰



序、早束は衣服并紙囊、煙艸囊、煙管、すて心と込て身の廻り  
残る処、調へ一品も不自由あるを、さかやうに心と碎し、追  
ひ恋ヶ窪の全盛しと見え、より却説五八一日吉之助と誘ひ長  
谷寺の観音堂へ参詣りて拜し居たり、後より穀物屋の  
若主人と呼者り、誰成中と吉之助へ振帰り見せ、喜八は  
何ゆへか、さる処へ拜顔せしや、當則は御住居より、りやと問  
て吉之助去りても、久々面會し及り、父は親子の親と切捨られ  
し始末と物語の上是、おる五八主は助ら、當時此仁方と罷  
在て彼禁が深ふ、馴深なる遊妓より密養て何不自由を暮  
罷在ども、万乞勘當の位と願はん為、觀世音へ参詣し及ぶ、処は

思ひ、你小出合し、ことの嬉し、よ喜八曰、先達て僕婦人、  
又不将の処、善兵工どの、金具屋御主人の御今、と大主人より  
高銀頂戴仕り渡せ、在附候、処其後不幸にて、二ヶ度の類焼  
く、當時松葉谷浅生、原町夫婦が膝と容るゝの住居され、  
も先以て五八様と申、御他人の段々と御厚情、忝し去るゝ夫  
主人より余り氣強も、されゝ天も地も競ぐ、のよ、御一人  
の若主人御勘當と、全御教訓以後と御懲り、りの儀、あざ、  
御身上、二千両や三千両、ハ風前の塵去、あざ、矢張廓は御座、  
され、遊妓君の御世話、成給、と有て、御侘の為、宜し、か、  
一先私侘へ御越有て、御不自由、あざ、バ却て御侘の種、とも成申

うん哉唯今直又御供申さんと有れば五八も掌と成て成程御  
尤も仰られし僕方又御座有べ御宅の妨あり此趣司君へ申  
べ去ちまじ御書翰御認有べ早東届とるべと吉之助と喜  
八又渡り別きて社へ飯りたり叔喜八へ吉之助と誘ひ吾家  
帰りたり処類焼度々の貧窮ゆへ間狭あれども漸其日と  
送りたる夜の具迎も綾又夫婦が寐る事りなれば其蒲團  
と吉之助も着其夜の夫婦とも辻番火鉢く寒風と凌ぎ  
是も主人と暖又寐させる支あつとありあり質物又  
差入るる万乞受出し用又立んと思へども其日送りの支更  
心は任せぬ過し其上吉之助一人聴る人又二人の糊口六か

かりぬれば妻於梅曰妾暫く何事成とも御主人の為あま一  
兩年奉公又出へ其給金と以夜具などの質受有て暖は休  
ませぬ入べ其儀より外又分別もつらう喜八も諾あつと泪と  
拭ひ綾は二歩や三歩の金子は迫り妻と勤仕は出さんとな不甲  
斐あは身の上も我るる残念朽惜く外は仕法もあなれば詮  
なく熱心有隣家の口入や頼れば幸官領家非常方教騎元  
山友之進殿方へ中居女と奴兼帯の婢女は住込り給金三  
両の定と願前借貳金の内一両貳歩の鏡臺鏡着替櫃か  
どと調へ残二歩と以夜具の質受有んと相談有て於梅の奉公  
出りるぞ衣ぬる

盗賊田湖伊平喜八は金と恵詰

行路の難水も非ず山も非ど唯人情反復の中にありと云ふ宜  
 かるゆゑ平常篤實正直との一人も時の災難は因て出来心と  
 以盗賊の業とぞ堪忍強さ人も又傷及ぶ支有慎みればある  
 べし然れども喜八の妻と奉公は出り吉之助あり其事と隠於梅  
 無拠彼が親類へ暫貸しりと偽り置残金と以て扇ヶ谷の海光明  
 寺の門前ある小田原屋源左門といふ質屋へ兼て預置する夜具  
 と質受せんと元利ともに揃へ来りぬに此質屋は此辺の大家  
 ゆへ入質と取居りぬゆへは下質家より金百五十兩持泰有て  
 質物と受取飯り店の手代彼百五十兩の金子は大きな取録

の中へ物の數ともせぬ投込られ喜八は質物出は往て待居  
 る間此始終と見てわづらひぬが意の中に借思ひけり  
 叔も世の中は貪福貴賤は是非もなれ事哉禁は今百五  
 十金有あは若主人の惚きつて御座る司女とやつと身脱  
 して思ふと添せ不自由はさせたりぬのと又勘當侘の種も  
 又二ツも可愛や妻於梅も労き水仕勤勞しさせたりぬの  
 と身身の貪しぬと歎豪富と羨みわろこそ道理ある万乞  
 黄白も人自由は成るべと忽發る貪欲心思ひ飯して心と推  
 して質受の品物と受取家は飯り吉之助と其夜より温うな  
 寐させたりが唯羨しき有福者の身の上偏は貪る黄白

九川正金庫車三

こそ明ても暮ても金銀貪やくと聞けりぞ衣あがりたる是は  
 一両日と過つると思ふ一日の暮過彼恋を淫の司女五八は誘  
 つて頭巾眼深は顔と包きて来り吉之助は會て萬幸侘気は  
 不自由なうんと菓子煮物やまよると常用とて金子二  
 兩と持来り兩人何角咄と咄は遠國の侍客の身脱せんとの相  
 談有ども原来好きぬ賓客とのい貴君と深約せし中更は辞  
 ぬいと何れも妓又まの身の上あは是非は往くはと  
 云へるは如何いせん二人の声と潜めて泣あがり五八は他へ出て  
 ろよ居る喜八は此赴余処ろろ聞取て吾身の於梅と恋し  
 時の心は競べて万乞身脱しく進せむはと思ふ眞実よりあと思

出たる質やの有福彼の家社二百金へ三百金へ石瓦も何  
 事も若主人の為をれば今宵闇と幸に彼家の土藏へ忍入て金  
 子と思付しが因果の発端唯主人又は諭盗心の発し所謂行  
 路の難山も水も非唯人情の反覆兼々剛立たる魚庵下  
 へ懐又手拭と面体と包二更と合圖は忍込返りて見又折節  
 土藏の繕普請とて足代懸られは是幸と登りたる胸は  
 裏く足は疼々と震ひ下漸と上りルろが流石は怕て震おる  
 処思ひもろろ側を引窓より僕一個出れば喜八は松り氣  
 も魂も飛復足代は抱付蹲踞あがりろろが彼男の曰休へ何奴成  
 と吾は今宵當質屋へ忍入て目差品と盗せんが為入込り店へ





次皿賊田湖伊平  
喜八が忠義  
感どく黄金と与  
ふ因

六十二文録  
喜八が忠義



六十二文録  
喜八が忠義

往んととるふ不測又屋根に於聞足音ゆ心障声を立ちたる真三  
 ツちるどと氷を敷又と突つけらる喜八志へたる何と包も隠  
 さん僕も盗賊又前んと家根へ上りしを彼盗賊の曰盗賊と働  
 かんとりつるは你的如戦と震ふての迎も成がじ思又貪の盗賊  
 と見ゆると云きて喜八仰のどく何と包も隠らんかやうくと  
 吉之介の始末よりして於梅の奉公司が身脱の咄する吉之介の歎  
 と助んと思へ処より逼て来たる新盗賊のよ一言葉みらる審又  
 語々れば你的如く身震くわて金銀と盗まんと思ひもよるべ汝が  
 りふ処主人の為とのへ又相違もつるまじ其心成甚不便ちる此金  
 子の候が盗ともま君又得らんべー吾是式の小さいまは拘る盗賊

よのり諸侯高家始街家農家の豪家となりと働く者今宵  
 は此家又或諸侯より金の代預り有品が望又聞る二万両や  
 二万両又更と欠ぬ豪賊ちる此三百両の金子と持飯り主人の  
 思も遂させ女房の奉公も取戻せよと財布の三百両と与れば  
 喜八の推戴々々叔も其元へ見懸るも及ぶぬ仁心る御方る命  
 と的は盗られし金と僕又下されし段誠は有るく存ざる処之  
 叔御名何と伺つれば無へ田湖の伊平とて今迄家藏と焼  
 人と殺したるを數度今も召縄へられ刑罪は行なふと聞  
 ばあれらの情と思ひ出く線香の一本も焼らむ死後吊て貰ひ  
 外又頼とつる更をく人や見咎めん疾く立飯と勧めれば

喜八の厚く謝して別まらるるが彼盗賊の首尾能望む処の品物  
 と盗り取庵厨へ火と附置姿と隠して立退るる折節風烈く  
 忽燃上りて近辺大騒喜八の狼唄せりく道出をせり震々  
 吾身の形も大金と懐又魚庵丁と携りて見外められと  
 逃る向より非常御改役沖田豊前侯の属下行山友之進馬上  
 くと足軽四人召連此処へ来て喜八と見附捕へんと有る脱  
 んと一りの処へ組者山田雲平とのみ者喜八が姿と怪しく曲者  
 と声と懸丸の袖へ捕へて曲者召捕せりと呼りりる由喜八  
 へ南無三三生懸命と彼庵丁と以元袖と撥くと伐落し迅くも  
 群聚の中へ逃込り雲平取道して残念と追駈れども群聚の

中あまの遠く見失りて袖の雲平の手に残り取逃したる  
 残念あがり行山友之進へ見せりる又行山馬上を是と見る  
 弁慶鳴の單りの古く成茶又染飯して著しる布子を程  
 なく火も鎮りれば皆々引取及なれり喜八の危うくと道  
 吾家へ飯り胸と撫下やうくと呼吸と休め吉之介へ唯今の  
 火更そと肝と潰りると紛かへ彼金子と戸棚の中の  
 此らの内へ納りるを危ふけれ  
 司戀ヶ窪と出奔喜八召捕る話  
 斯て暫く有て表の戸と叩者り扱役人衆の追来りいと  
 喜八の心も轉動氣もろろく喜八様の當家をるやと声

女多れぬ叔いと喜八の氣轉と利して司君うとい声は然り  
 とつゝは諾る戸明たれが吉之の真の間でこれと聞走り出司成  
 りつゝして夜中更へ来りしと問は此れと御断申せし身脱の  
 咄が急よ成し又扱ふ廊を脱出未り候と聞て吉之が喜八  
 も何よもせよ人目よめぬ内と奥へ伴ひつゝ程も夜も明け  
 ぢれが喜八の店と開き茶の下と焚付扱々ゆぐの危う事やと  
 獨言謚めて吉之が司婦の兩人と寐をて掃除をとてあつた  
 処へ彼山田雲平平手らへ通り懸り折節煙艸の切れが喜八の  
 店又て煙艸を少し調へる喜八が着物よふめと眼が付てゆぐ切  
 取ら袖の鳴は能似ふと思ひて喜八が煙草と出と時と袖と見ふ

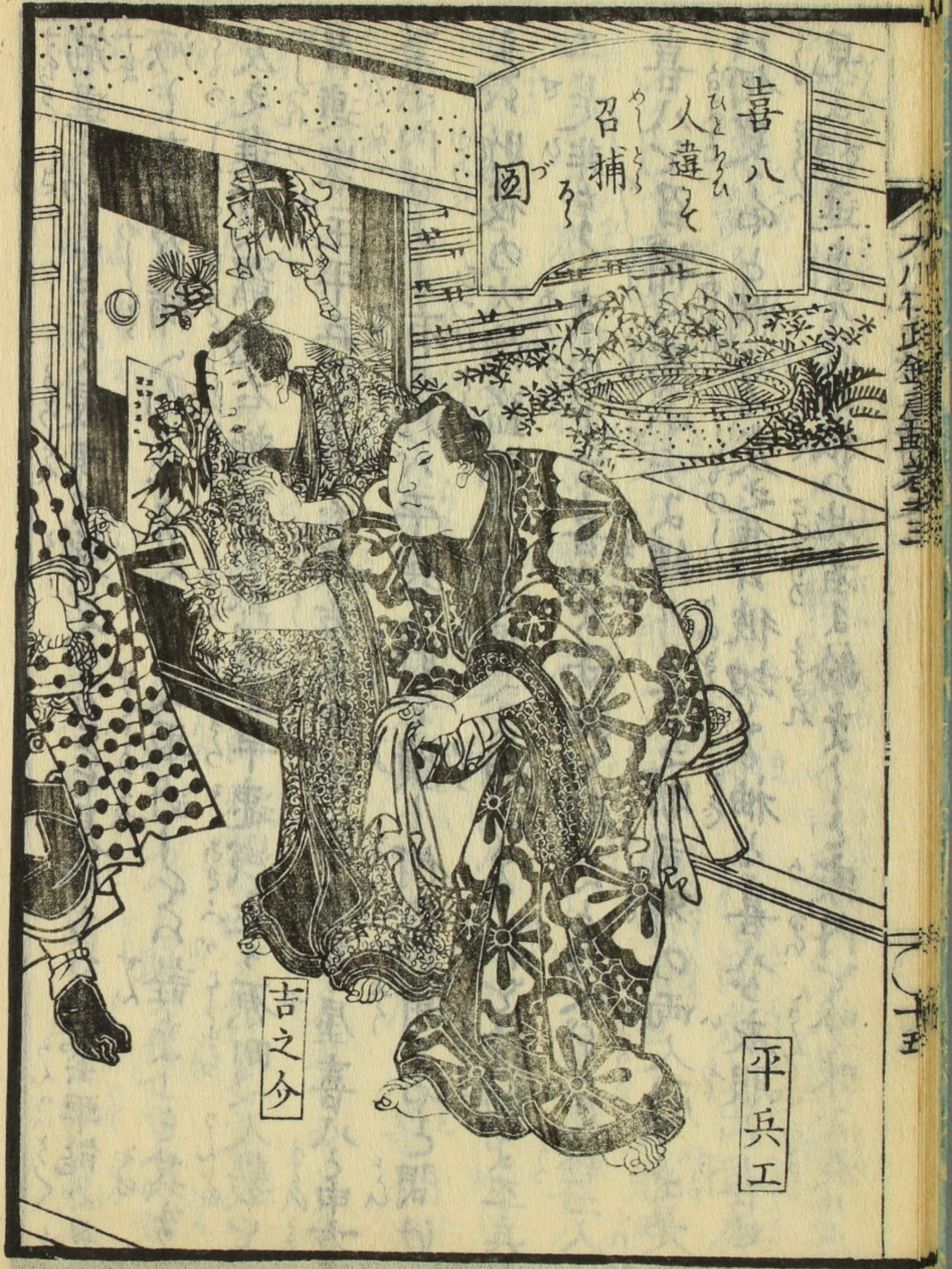
筋違は切まきさま狼明て着るころこそ是非も云平能々見  
 渾し直は召捕へんとどり人ども又取逃しつゝ詮をよと其ま  
 友之進方へ罷越右趣と尔談の上早速浅生を原町へ人數と  
 召連家王平兵工と呼び其方支配借家煙草屋喜八と申方  
 へ案内せよと有れば平兵工肝と潰し何の御用とやと問は  
 ば昨夜の火附盗賊の召捕へる向うの袖と證扱は平兵  
 工是非なく案内して喜八は子細を問ふといへども足輕二人  
 喜八を召捕へ高小手は縛り吉之助司婦の兩人忙し是  
 何更ふと憫らる友之進の彼切ら袖と喜八が衣服と合せ  
 見は相違なきが叔は此者は紛まると案内と吟味は及ら





喜八

友之進



喜八  
人違  
召捕  
圖

吉之介

平兵工

処相入の中に古はららりり其中に金三百兩財布小入て有と取出  
 一弥火附盗賊又極まると其趣と書認大川彦へ引渡され  
 吉之介司婦の家主平兵工、御預より喜八の早速入牢不及り  
 時又家主平兵工竊又喜八の會て存知りぬゆへ奈何われ  
 此不始末と問われれば喜八の王家の一子吉之助長谷寺より誘ひ  
 飯りし処より妻於梅が水仕奉公と遣り、貨物受出しの砌大  
 金のつとを羨しとありゆへ若主人は恋々窪の司君の身脱として  
 進せし思ふ処よりして質屋へ夜盗又忍び込んと屋根へ上りし一  
 個の盗賊は出會三百金と貰ひ受ると始末より出火よりする  
 追の処包す有のまると語りければ家主平兵工大さく驚馬と畢

竟主人の一子吉之介と思ふ処の眞実よりの支るれば平兵工も大  
 きく憐れてくれれば何れも御慈悲と願ひ見へし入牢の砌ハ  
 牢中へ心附とせよば為より、久しとて平兵工の紙書より金  
 貳歩と出し喜八が口中へ含ませ牢へ送りて家へ飯りて叔々  
 喜八へ不便の支るる寂早近日は御定刑は行へる、是も  
 全く吉之助どの、勘當の詫のこゝ又ハ妻於梅も取戻さん  
 為よ不慮の発心して質屋へ盗賊は這入り金三百兩飯初も  
 盗する支頭として召捕へられり既に入牢又及り発端ハ其許  
 両人の支るるといふれば吉之介大さく驚馬と然ハ喜八ハ我ら  
 勘當詫の種とせん為其上彼是我が不自由と氣毒と思ひ

真又発心して盗賊を志して既又定刑を行く時我手よく殺せしも同前より命の親も思ふ喜八殺して我生て假令勘當救ふとも何面目有て生ておらるべきと涙も暮て居る司婦も此中うに大變の發るなりしも元へ妾ゆく共死に縊らんと騷動又及びぬれば家主平兵衛大さ又驚き二人とも死なれど何の益りなる何卒兩人とも無事と喜八を助る分別はまじ假令無事と往るべとも責て命の助るやう御慈悲願ひ見るべし是は附ても栗橋駅へ人を遣して別るまじ某直々栗橋の本家へ往て御賢父吉左門殿と對面し相談の上喜八が命乞とせん先夫追へ諺りたるのぐくべと女房渾家の者共といふ會平兵衛

へ出廊の支配人善兵衛と承談の上添状と持くらりて下総國栗橋へと赴きたる家主平兵衛が実義の程ど頼りて

近世 美談 大川仁政録羣輯卷之三終

